【学術論文（査読無し）】 長崎大学総合環境研究 第26巻第1号 pp.12-20 2023年12月

高校におけるジオパークの観光教育への活用：室戸市の事例

大木菜緒*・大田真彦**

Utilizing geoparks for tourism education at high schools: A case study of Muroto City in Japan

Nao OKI*, Masahiko OTA**

Abstract

This study provides insights into the utilization of geoparks for tourism education at high schools. The focus is on Muroto City, specifically Muroto UNESCO Global Geopark and Kochi Prefectural Muroto High School. Firstly, geopark officers of Muroto Geopark were interviewed to explore their collaboration with high schools. Secondly, teachers in charge at Muroto High School were interviewed to understand the curriculum and the details of subjects related to geoparks. Thirdly, semi-structured interviews were conducted with five students who participated in "Geopark Studies" at Muroto High School in 2021, in order to specifically clarify what they learned. The curriculum was designed to utilize the Muroto Geopark throughout the three years. The analysis of the student learning showed that all students recognized the importance of understanding the region, and many expressed that they rediscovered the charm of Muroto, which they had previously taken for granted. Furthermore, discovering the attractiveness of the region and deriving enjoyment from it led to a desire to disseminate the knowledge gained to both within and outside the prefecture, creating a chain of motivation and action.

Key Words: local resources, human resource development, student learning, rediscovery of the value of the region

１．はじめに

観光は、裾野の広い様々な産業を包括する経済活動の総体である。観光開発をめぐる人間活動は、地域の自然環境や経済、生活、および文化にさまざまな影響を与える（大島 2016）。観光資源の効果的な利用を図るには、働きかけの対象となる観光資源だけでなく、観光利用のために働きかける側の「人びと」に着目する必要がある（森重 2020）。それゆえ、観光を通し、地域資源の適切な保全と活用を次世代に責任をもって継承していける人材を育てる学習機会、すなわち広義の観光教育は重要なテーマである。

本研究では地域資源を用いた観光教育の可能性を分析するためにジオパークの高校教育での活用に着目する。ジオパークは、科学的、景観的に価値のある地形・地質や生態系などを保全するとともに、それを教育や観光に生かし、さらに地域振興を図るという多目的な仕組みである（小泉 2019）。

ジオパークの場合、従来の観光と異なるいくつかの特色を持つ。そのうちの一つが、郷土の価値発見

* 長崎大学環境科学部
** 長崎大学総合生産科学域環境科学系
受領年月日：2023 年 5 月 29 日
受理年月日：2023 年 10 月 31 日

や理解に貢献しうることである。小泉によると、ジオパークの地元住民は、ジオパークの地形・地質や景観、生態系、文化等を子供のころから見慣れているため、当初はその価値がよくわからないという傾向がある。しかし、ジオパークという仕組みは、地域資源の再発見を促し、郷土理解にも繋がりうる。ジオパークに認定される前段として、各地域では自然資源や文化資源などを調査する。これはいわば地域の宝探しであり、それによってそれまで知られず隠れていた優れた自然や文化が多数再発見されることが多い。再発見されたジオ（地質・地形・生態系など）に関わる宝物は、筋の通ったジオストーリーにまとめられると、子どもから大人までの地域の人たちが誇りと自信を持つことを可能にする。また、ジオパークはガイドという職業を生み出し､宿泊や、来訪者による野菜や果物、魚、酒などの消費を通じて、地場産業の活性化ももたらしうる。つまり、ジオパークを用いて観光について考えたり学んだりすることは、地域資源の再発見や利活用と関係している。

そして、ジオパークの教育的価値は、ジオパークが位置する自治体ないし周辺自治体の学校が自らの教育活動と組み合わせることによって、さらに高まると考えられる（竹之内 2016）。特に、高校という段階で、地域資源を活用した観光のあり方について考えることは、地元の高校生の進路選択にも影響を及ぼす可能性があり、重要な点と考えられる。

本研究は、室戸市、すなわち室戸ユネスコ世界ジオパークと高知県立室戸高等学校を事例として、高校におけるジオパークの観光教育への活用に関する知見を提供する。室戸高校では､「観光教育」と銘打ってジオパーク活動に取り組んでいるわけではないが、ジオパークを積極的に活用して教育活動を行なっている事例であり、その活動が地域資源の活用という観光教育の要素を含むことから、事例として選択した。室戸高校については、柚洞ら（2016）による詳細な事例報告があるが、調査時点から数年が経過しており、最新の情報を提供することには意義があると考えた。

学校教育へのジオパークへの活用については、2016 年に『地学雑誌』において特集が組まれるなど、知見の蓄積がある（有馬 2016）。高校に関する事例には､小山ら（2011）､柚洞ら（2016）､坂口（2018）､小河原ら（2022）などがある。しかし、ジオパークを用いた教育活動は、地学分野が重視される傾向が強く、それゆえ、どのような観光教育の側面があるのかに関する考察は限られている（深見 2014; 有馬ら 2016）。

また、本研究では、ジオパーク側から見た個別の教育プログラムの実践内容だけでなく、高校のカリキュラムの全体像のなかでのジオパークを活用した科目の位置づけを確認し、また、生徒の具体的な学びの様相を、インタビューを通して明らかにする。これらの点は､先行研究で手薄な部分である｡特に、生徒自身が何を学んだと認識しているかを、振り返りアンケートなどではなく、個別のインタビューによって検討した研究は限られている。

２．方法

２．１　調査地概要

室戸ユネスコ世界ジオパークは､2008 年に日本ジオパークに認定され､2011 年には世界ジオパークに認定を受けた｡2015 年にジオパークがユネスコの正式プログラムとなった後は、ユネスコ世界ジオパークとなっている。室戸市全体がジオパークという位置づけとなっており、これが地域の大きな特色のひとつとなっている。本ジオパークには、ジオパーク推進協議会専門員が 2022 年 10 月現在で 3 名在籍している。内訳は、人文地理学、地質学、国際交流である。本ジオパークは、羽根、吉良川、室戸、佐喜浜、および室戸岬の 5 つのエリアに分かれている。

高知県立室戸高等学校は、1946 年に創立された。当初は普通科高校であったが、1997 年に、高知県内初の総合学科高校として再スタートをしている。現在、総合学科の生徒は、文理総合系列、生活福祉系列、および商工業・芸術系列のいずれかに所属する形になっている。生徒数は、1960 年代には 800 人近くいたとされているが（柚洞ら 2016）、現在では、生徒数は一学年に 35 人程度となっている｡日本で初めて「ジオパーク学」という名の授業を設置するなど（柚洞ら 2016）、市内の唯一の高等学校として、旧来より室戸ジオパークとともに持続可能な社会の担い手を育む教育を実践してきた。

室戸高校は、2019 年度から 3 年間、文部科学省の地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）指定校に採択されている｡室戸市では、急速な高齢化の進行による雇用減少などの課題から、地域の人材育成に向けた組織的・継続的な取り組みが必要であるとの認識がある。それゆえ、室戸ジオパークに関わる地域唯一の高等学校として、その資源を有効に活用し、世界の様々な地域と関わることで、グローバルな視点で物事を捉えることができる

資質・能力を持つ人間を育てることに重点を置いている。

２．２　調査方法

第一に、室戸ユネスコ世界ジオパークの概要を公開資料から整理するとともに、ジオパーク専門員に対し、ジオパークとしての高校との連携について聞き取り調査を実施した。

第二に、室戸高校での、ジオパークを用いた教育活動の担当教員に対し、聞き取り調査を実施した。主な質問内容は、ジオパーク学習を取り入れた各科目のカリキュラムについての質問、その他ジオパークと連携した取り組みについて及び今後の教育方針についてであった。

第三に、室戸高校の 2021 年度における「ジオパーク学」への参加生徒 5 人（それぞれ、A、B、C、D、および E さんと表記）に対し、彼らが何を学んだかを具体的に明らかにするために、半構造化インタビューを実施した。主な質問内容は、ジオパーク学において特に印象に残っている取り組みや科目を通した自身の成長や変化、受講前後における地域への認識の変化や進路選択への影響などであった。A、B、C、および E さんは室戸市の出身、D さんのみ市外の出身であった。

上記の調査は、2022 年 11 月から 12 月にかけて実施し、いずれのインタビュー調査も、Zoom を用いたオンライン形式で実施した。

３．結果

３．１　室戸高校におけるジオパークの活用

３．１．１　カリキュラムマネジメント

室戸高校のカリキュラムマネジメントは図 1 のようになっている。後述するいくつかの科目を通して、3 年間を通して継続的に、ジオパークないし地域と関わる教育が実施されている。

実施体制として、キャリア教育に関わる特色ある科目の取り組みを発展させ、人との繋がりの深化、地域貢献、地域課題解決学習を行うため、コンソーシアムを組織している。また、海外交流アドバイザー等の配置や他組織との連携強化によってカリキュラム開発に取り組む体制もつくられている。室戸ユネスコ世界ジオパークの素材、人的ネットワークを活用し、国内外の高校との交流を生徒が積極的に活動する機会を増加させている。

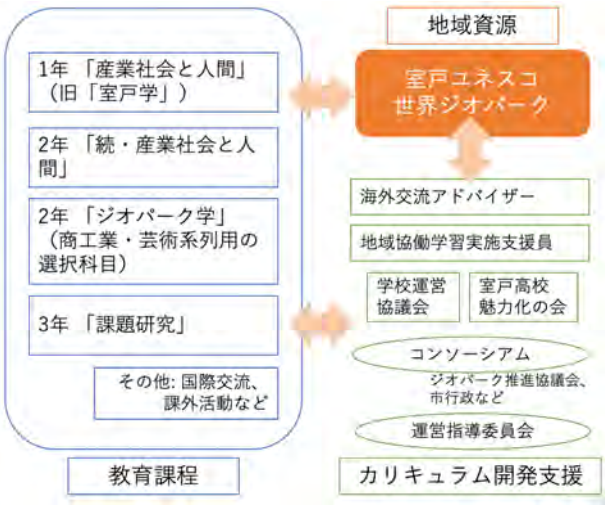

図 1　室戸高校のカリキュラムマネジメント
（高知県の資料[1]より筆者作成）

３．１．２　重要な科目の詳細

「産業社会と人間」（1 年生）

室戸高校では、総合学科設置時から「産業社会と人間」という授業が開講されている。本授業は従来「室戸学」と呼ばれていた。自己理解から始まり、自己理解のための諸検査、職業人の講話、職業・産業に関する基本的理解、上級学校の見学や職場訪問・活動のまとめとライフプラン作成と発表、地域や国際社会に関する基本的理解のような多岐に渡る内容を通して、将来の職業選択に役立つように自分の学習計画（科目選択）を作ることを目的としている。

必修科目であり、2022 年度は 1 年生 35 人が履修した。室戸高校の教諭を中心に実施されている。この授業の目標は、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、職業の選択決定に必要な能力・態度、将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養うとともに自己の充実や生きがいを目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度の育成を図ることとされている。また、現実の産業社会やその中での自己の在り方、生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度の育成を図ることも含まれている。

1 年間の授業計画としては、1 学期は「知る」活動を中心とし、室戸の魅力やジオパークについて意見を出し合う。観光施設だけではなく、人口や学校など、生活環境も含めて、室戸について知っていることを出し合う。あるもの/ないもの/分からないものを洗い出し、客観的に室戸を認識する。2 学期は「体感する」「考える」活動を中心とし、ジオパーク資源

の活用法について考える。体験を踏まえて感じたジオパークの魅力とは何か、その魅力を今、室戸市や市民はどのように発信しているか、自分ならどうするかを探究する。3 学期は「考える」活動を中心とし、自分の将来と室戸との関わりについて考える。1 学期、2 学期の学習を踏まえて、人や場所など室戸の魅力・資源は何か、どうやってそれらの資源を活用し、室戸を活性化していけばよいかを考える。

2022 度の授業では、全 32 回の授業のうち 5 回が外部講師の協力のもと行われた。ジオパークを取り扱った回も多く、ジオパークについての知識を深め、実際に歩いてみる活動が実施された。また、地場産業を行っている人物にインタビューし、室戸に来た経緯や室戸で働くことにした経緯、その方自身が室戸について感じている課題や思うことを聞きとるなどの活動が行われ、生徒個人のライフプラン作成に活かされた。本授業で生徒が作成するライフプランは、必ずしも職業選択と密に結びついているわけではないとのことであった。1 年間の学校生活の中で自分自身の興味がいかに変化したか、その変化を将来にどう繋げていくかといった近い将来を考える生徒も多数いるとのことである。

「続・産業社会と人間」（2 年生）

1 年次で実施した「産業社会と人間」の学習内容を継続し、自己の進路選択の再検討を行い、自己の将来像についてさらに具体化し、計画性のある生活を送ることができる態度・姿勢の育成を図るものである。また、3 年次の「課題研究」に向けての主体的な学習態度の育成を図るとともに学び方やものの考え方を身に付けることを目標としている。さらに、自己啓発的な学習体験や討論などを通して、職業の選択決定に必要な能力・態度・将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養うとともに、自己の充実や生きがいを目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度の育成を図る。また、現実の産業社会やその中での自己の在り方、生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度の育成を図るとしている。

年間の指導計画としては、1 学期に地域課題の発見、解決策を考え発表し、2 学期に 1 学期の内容と分析を踏まえて具体的方策を考え発表する。また、3 学期にはこれまでの学習を活かして課題研究のテーマを設定することとしている。

2021 年度には、室戸活性化計画を立てて発表に取り組む、統計の活用方法や室戸市の多文化共生について学び、校内プレゼンテーションを行うといった取り組みが見られた。

「ジオパーク学」（2 年生、商工業・芸術系列の生徒が選択）

室戸高校では、現室戸ユネスコ世界ジオパークが日本ジオパークに認定を受けた平成 20 年の翌年、平成 21 年より「ジオパーク学」という授業が開講されている。これは、商工業・芸術系列の生徒が選択できる通年選択授業であり、室戸ジオパークが世界認定を目指す中で設置された。高知県議会において、室戸ジオパークを学ぶ授業を設置すべきだとの意見が議員から出されたことが契機となっている（柚洞ら 2016）。

2022 年度は商工業・芸術系列の 2 年生 11 人が履修した。ほとんどの授業でジオパーク推進協議会の地理専門員、地質専門員の 2 名を招き、そこに室戸高校の教諭 3 名が加わって行われた。この授業の学習目標は、世界ジオパークや自然、歴史・文化遺産、地場産業について学び、その資源を最大限活用することによる地域の活性化についての方法を学ぶこと、および、地域を調査・観察する力、資源の活用方法を企画する力、企画したものを社会に伝えるプレゼンテーションの力を取得できるようにすること、とされている。

1 年間の授業計画としては、主に 1 学期で地域理解をすすめ、それをもとにテーマ設定及びグループ活動を行う。2 学期では、ジオツーリズムの実践としてグループに分かれ、テーマ別にジオパーク活用プランを考える。3 学期では 1 年間のまとめとして、ジオパーク活用プランを発表するといった流れである。1 年間を通して室戸の自然や歴史・文化等を学ぶことで、地域理解を進め、将来の室戸の活性化を見据えた人材育成を目指している。取り扱う題材は決まっておらず、地学、地理、宗教や文化など、題材は幅広い。生徒からの案によって、授業で取り扱う内容は変化する。

インタビューで聞かれた特徴的な取り組みのなかに、「食べて触って聞くジオパーク」がある。これは、視覚障がい者を対象とし、「視覚」を使わずして室戸市の魅力を伝えられるガイドツアー案を考え、模擬ガイドツアーを行い、成果や課題を発表するものだ。生活福祉系列と商工業・芸術系列の生徒が協働して取り組んだ事例だ。視覚障がい者の方にもジオパークの魅力を伝えられないか、どのような案内ができるのかをユニバーサルデザインの観点から考える活

動だ。室戸ジオパーク内にある観光施設（展示施設）に視覚障がい者を案内し、視覚の代わりに触覚（手触り）で感じてもらえるような展示を案内する際の工夫を考える。この取り組みは「視覚障がい者の方にも室戸ジオパークを楽しんでもらいたい、室戸の魅力をいろんな人に伝えたい」という生徒たちの思いから始まったとのことである。主に、①室戸の地形・地質、樹木を触覚や感覚を使って目が見えなくても伝わる内容にする、②深層水を使ったアイスクリームを用い、味覚を使ったジオパークの魅力を伝える工夫をする、③室戸の石を触り、触覚で室戸の魅力を感じられる工夫をする、の 3 つの活動に分かれている。

「課題研究」（3 年生）

総合学科における学習の基礎の上に立った総合的・発展的な課題を生徒自らが設定し、個人またはグループによる継続的な学習を通して、自発的・創造的な学習態度や問題解決を養うことを目標としている。

2021 年度は「地域に関わること」をミッションとして、生徒各自の興味・関心や進路希望に沿った研究がすすめられた。課題テーマ設定当初より室戸市に関係した活動を考える者もいたが、中には自分の希望する研究と、地域とのつながりを発見することに苦心した生徒も見受けられた。そういった場合は生徒の希望を優先させた。室戸市の名所及び特産品紹介や、漁業の魅力発信、室戸市が抱える課題に着目した地方創生に向けた取り組みの提案、そして小学生への異文化理解教育など、研究内容は多岐に渡る。

その他: 国際交流

室戸高校は、ジオパークを介して、マレーシアのランカウイ・ユネスコ世界ジオパークと、積極的に国際交流に取り組んでいる。また、ジオパーク認定以前から、オーストラリアのポートリンカーン高校とも交流を行なっている。

３．１．３　今後の展望

室戸高校の担当教諭へのインタビューでは、今後の教育の発展について、地域の資源のより一層の活用について言及があった。室戸市唯一の高校かつ地域振興及び人材育成の核となる教育機関として、今後の室戸市の繁栄のために学校としてもできることを考えていかなくてはならないと、K 教頭は述べた。ジオパーク推進協議会との連携協定をベースに、外部講師の活用も積極的に取り組んでいきたいと語った。

他方、課題は、教科間の連携とのことであった。そもそも、文科省事業の指定校としての 3 年間を通して、学校全体のカリキュラムをいかに構築していくかが問われていた。一つの好事例として、生活福祉系列と商工業・芸術系列という異分野の生徒たちの協働による視覚障がい者向けの観光を考える取り組みがあったが、このような事例を今後いかに増やすか、展開するかが重要とのことである。ESD（持続可能な開発のための教育）の視点で地域貢献に繋がる活動を体系化することを目指す中で、生徒数および教員数の減少等の問題も鑑み、学校自体の持続可能性を探らなければならない時期に差し掛かっているとのことであった。

３．２　「ジオパーク学」を通した生徒の学び

前節で述べたように、「ジオパーク学」は、室戸高校の商工業・芸術系列の生徒を対象に通年で開講されている。地域固有の財産であるジオパークを活用した教育が高校生の地域（生まれ育った地元）に対する考え方や愛着にどのような変化をもたらしたのかについて、半構造化インタビューを実施した。

３．２．１　「ジオパーク学」の中で最も印象に残っている取り組みとそこから得た気付き

A さんと B さんは、「ジオパーク学」の中で最も印象に残っている取り組みとして、室戸ジオパークの観光ガイドを視覚障がい者向けに作成した取り組みを挙げた。彼女らの代（2021 年度）では、室戸高校初の取り組みとして、商工業・芸術系列と生活福祉系列の異系列のコラボレーションを実施した。

ユニバーサルデザインの観点を福祉系列の生徒からアドバイスしてもらい、観光ガイド内容は「ジオパーク学」を受講している生徒が考えるといった協働体制をとった。紹介したい場所を生徒自ら調べ、決定した。現地に赴き、実際に行われている観光ガイドを体験し、そこからオリジナルのガイドを考案していった。目で見て分かる、健常者にはわざわざ口では説明しないような内容も、分かりやすく説明することを工夫した。五感を用いたガイドの仕方、ガイドのコースや内容を考え、実際にガイドをしている動画を作成した。

健常者が面白いと思わないことでも、様々な事象を敏感に感じ取る視覚障がい者にとっては面白いと

いうこともあると、生活福祉系列の先生や生徒から助言を受けた。生徒自身が普段の生活では気付かない・感じないことにまで気を配ってツアーガイドを考えることが難しくもあり、面白かったと語った。最後は、生徒同士で目隠しをしてガイドを体験し、意見交換を交わした。

C さんと D さんは、国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）主催の「すべらない砂甲子園」において、準優勝の成績を収め、YouTube に出演したことを挙げた。すべらない砂甲子園とは、全国津々浦々にある砂が戦い、「一番すべらない砂」＝「最強の砂」を決定する「超新感覚室内実験的格闘競技大会」である。2021 年度、室戸高校は室戸ユネスコ世界ジオパークと共同で、室戸岬先端の斑れい岩の砂を応募し、準優勝を果たしている。他の地域の岩や観光スポットを知ることができ、新たな発見を得ることができた、普段はできない YouTube 出演などの貴重な経験ができたことも新鮮であったと語った。

E さんは、「ジオパーク学」で定置網漁業というテーマで課題を進めたことを挙げた。そこから、3 年次の「課題研究」において、市役所及び椎名集落活動センターの方々と協力し、定時かつ固定給で働くことのできるサラリーマン漁師と定置網漁業を結び付け、移住促進に係る取り組みを考えた。魚の採れる量の多さや定時かつ固定給という他の漁師とは異なる働き方をするサラリーマン漁師に着目し、定置網漁業と結び付け、定置網漁業と移住者を増やすためにサラリーマン漁師を活用するという案を「定置網漁業と移住促進」というテーマで発表した。

具体的には、椎名のお祭りや定置網漁業のサラリーマン漁師の姿を動画にし、「課題研究」で発表した。その成果物は高い評価を得て、椎名集落活動センターの方のインスタグラムに掲載された。実際に定置網漁業の漁師と話をする機会もあり、椎名集落に移住してくる人の多くは、サラリーマン漁師の固定給に魅力を感じたこと、まちなみや人の良さを理由として挙げているなど、現地に足を運んだことで気づくことが多かった。

３．２．２　「ジオパーク学」を学んだことによる室戸に対する考え方の変化

A さんは、通っていた小学校・中学校の総合的な学習の時間においてもジオパークの勉強はしていたものの、地元のガイドから説明を受ける受け身的な学習であったため、発展的な学習には繋がらなかったと語った。高校に入学すると、「ジオパーク学」をはじめ、自分たちで学び、調べ、行動を起こすという能動的な学習に変化した。ただ一方的に話を受けるときよりも、自ら地元の魅力を見つけることに面白さを感じるようになり、自然と文化の繋がりにも面白さを感じるようになった。

B さんは、「ジオパーク学」を受講する以前は、岩や山の形など見慣れた景色に価値を感じていなかったとのことである。しかし、「ジオパーク学」を受講したことで、地形の成り立ちや背景、人との繋がりを知ることで、愛着が生まれた。自ら感じた室戸の魅力を、県外ひいては世界の人に知ってもらいたいと思ったのが自らの成長であり、変化である。それに付随して取り組んでみたいこととして、室戸の自虐 CM の作成を挙げた。自分自身、「ジオパーク学」を学ぶ前は岩しかないと思っていた室戸という地域の魅力を再発見したことで、岩しかないこんな地域にも裏を返すと多くの魅力が詰まっているといった趣旨の CM を作成することで、見た人に室戸に親近感を持ってもらえるのではないか、とのことであった。

C さんは、「ジオパーク学」を受講する以前は、ジオパーク自体にさほど興味や関心がなかった。しかし、受講することで、岩の成り立ちなどを知り、普段見慣れている景色にも成り立つに至った背景や歴史があることに感動したと語った。

D さんは、室戸市外の出身であり、高校入学を機に室戸市と関わりを持つようになった。「ジオパーク学」を受講する以前は、ジオパークというもの自体を知らなかったと言うが、受講を終えた今、地域の特色を学ぶことができた貴重な経験だったと語った。

E さんは、受講以前は、ジオパークは岩のあるごつごつの範囲だけだと思っていたが、受講する中で室戸市全体がジオパークであることを知りすごいと思ったと、自身の中でジオパークの概念が変化したことを語った。普段友人の家に遊びに行くときに通る西山台地（地面が盛り上がってできた特徴的な地形）を、ただの登るのがしんどい山だと思っていたが、「ジオパーク学」の中で、西山台地でサツマイモやスイカなどの産物が採れることを学び、ただの山ではないことを知った。その産物が道の駅などでも売られていることを知り、地域における様々なものの繋がりを学んだと、自らの認識の変化について言及した。

３．２．３　「ジオパーク学」を経た自身の内面的成長と今後の活かし方

A さんは、2 年次の「ジオパーク学」における視覚障がい者向けの観光ガイド作成後、3 年次に進級した後もユニバーサルデザインの取り組みを続け、いろいろな場で発表する機会があった。最初は生徒自ら主体となって活動をすることに戸惑っていた。しかし取り組みを重ねるごとに、人に説明するために自分たちがもっと深いところまで理解しなければならないという思いに変化した。発表するという経験自体が活動に対する前向きな姿勢を培い、自己成長に繋がったと語った。

また、A さんは、グラフィックデザイナーの専門学校に進学予定であり、「ジオパーク学」での学びが進路選択にも繋がっている。受講以前は、どこでどういうデザインの仕事をするなど具体的な進路は決めていなかった。しかし、受講を通して、地元の魅力を自ら発信したいと考えるようになった。現在、室戸には専門のデザイナーなどがおらず、地元を PR するポスターなども簡易的なものが多い。ゆえに、専門学校でデザインを学んだ後に地元に戻り、地元の魅力を自ら発信できるデザイナーになりたいと考えた。具体的にやりたいこととしては、ポスターデザインの質を上げることである。ターゲットによって PR の仕方を変化させるなど、デザインを学んだからこそできる室戸の PR の仕方を考えたいと語った。

B さんは、自らの周りに地元の良さを実感していない人が多いことを悲観している。地元に魅力を感じて室戸に残ってくれる人を増やしたいにも関わらず、実現しないのはなぜか考えるようになった。「ジオパーク学」を通して地域を知り、魅力を再発見できた今、依然として地域学習や魅力を伝える場・学ぶ場がまだまだ不足しているのではとの見解を語った。卒業後は地域づくりやツーリズムを観点に学ぶ大学へ進学予定であり、地域づくりを学び、将来は地域学習や地域づくりに関わる仕事をしてみたいとのことであった。

C さんは、「ジオパーク学」でのグループワークや発表などの諸活動を通して、いろいろなことに積極的に取り組み、行動できるようになったと、自身の成長を語った。地元の魅力をもっといろいろな人に知ってもらいたいという前向きな気持ちにも繋がった。

D さんは、これといって言語化できることがないとのことであった。

E さんは、学校外に出て、様々な立場の人が集まる発表の場でコミュニケーション能力が高まったと自らの成長を実感しているとのことであった。

３．２．４　受講者の視点から見た「ジオパーク学」での学習効果のさらなる向上のために求める要素

A さんは、2 年次開講の「ジオパーク学」及び 3 年次開講の「課題研究」の授業において、自分の好きな分野と絡めて学べる取り組みが増えると、より生徒が主体的に行動できるようになるのではと語った。ジオパークに興味がない人でも、例えばデザイン分野などの自分の興味や関心と絡めることで楽しく学ぶことができる可能性について言及した。生徒自身が学ぶことに対して積極的になれる活動が増えたらと展望を語った。

B さんは、室戸を他の地域と比較する機会をより多くの生徒に対して与えてほしいと語った。授業での取り組み内容を学外の学会で発表する機会があった。その際、選ばれた人しか発表に参加できなかった。実際に自身が発表に参加してみて、室戸の魅力は自分が思っていたよりも県外ひいては世界にも通用することを認識した。その体験を受け、もっと多くの人に室戸と他地域を比較する場を体感することで地元の魅力を再認識してほしいとのことであった。

C さんは、講師からの一方的な説明だけでなく、実際に経験して触れてみるという取り組みをより増やしてほしいとのことであった。これにより、自分たちもより室戸の魅力を実感でき、他の人に魅力を伝える際も、より詳しく深いところまで伝えることができるのではと展望を語った。

D さんは、授業の取り組み内容に関し、もう少し自由に実施させてほしいと語った。まだ実行していない段階で現実性に欠けるという理由で提案を却下された。トライアンドエラーで実現可能性が上がることもあるため、制限がある中でも検討を重ねるなどしてできることの範囲及び幅を広げてほしいと語った。

E さんは、授業での取り組みを発表したとき、質疑応答の際に上手く回答できなかった経験を挙げ、体験の重要性について語った。「ジオパーク学」において、定置網漁業を見に行く機会が数回しかなく、質問しきれなかったことや、実際に経験していないことで回答できなかったことが多かった。ゆえに、授業において、パソコンで調べる時間だけでなく、もっと自分で体験する時間をもっと増やしてほしいと展望を語った。

４．考察

室戸高校のカリキュラムの分析からは､｢産業社会と人間｣から始まる室戸という地域を活かしたカリキュラムが 3 年間を通して組まれており、地域を知り、その学びを地域の発展に活かすために自分に何ができるか、自主性を持って考える活動が多く見られた。これら一連のカリキュラムは、生徒一人ひとりが身のまわりにある地域、ひいては観光をめぐる問題に対してどのように考え、行動していくべきかを考える学びの場を提供していると言える。

生徒の学びの分析に関し、まず、地域を知ることの重要性を全員が実感していたことが指摘できる。ジオパーク学受講前後の変化として多かったのは、今まで当たり前に感じていた室戸の魅力を再発見できたということであった。日常生活の中で見慣れたものや景色に魅力を見出すのは難しい。しかし、地域素材の成り立ちや歴史に目を向け、立ち止まって学ぶことで、それまで見慣れたものの価値に気づいていく。これが、地域を担う人材の育成に繋がっていく。また、座学ではなく現場に赴いて体験することの意義も強く認識されていた。

そして、意欲や行動の連鎖も確認できた。地域の魅力を見つけることに面白さを見出すと、次はその学びを活かして地域の魅力を県内外に発信していきたいという意欲に繋がる。こうして地域の魅力は巡る。地域資源や観光資源の活かし方に焦点を当てた能動的な学習体制は、生徒の学びの楽しさを引き出し、さらなる学習意欲を高めていく。

ジオパーク学が生徒の進路選択に与えた影響として、5 人中 2 人はジオパーク学の学びを進路に活かしたいと回答した。その他 3 人は進路に対するジオパーク学の影響は特段ないものの、自身の成長や学びに繋がり、今後の生活に活かしていきたいという意思を示した。

以上から､室戸高校における｢ジオパーク学｣は、人材育成及び地域振興の観点から総括し、地元を見つめ直すことで、地域素材の魅力を引き出し、愛着を深め、地域を見つめ直し、自ら地域に思いを馳せるきっかけになっていると指摘できる。

生徒からは､より体験や現地訪問の時間が欲しい、他地域との比較の機会が欲しい、よりテーマ設定などの自由度を高めて欲しいなどの提案も聞かれた。全てを反映させることは、高校運営上の種々の制約上困難である可能性もあるが、有意義な意見と考えられる。

５．おわりに

ジオパークを地域資源として位置づけた時、その利活用の仕方は様々である｡ジオパークそのものや、その地に広がる自然を学ぶもの、ジオパークの観光としての活かし方を主体的に考案するもの、長期的に取り組むもの、一過性のものなど、取り組む内容も期間も様々である。本稿は室戸高校の事例研究のみの提示であるため、比較分析は対象外であるが、高校とジオパークの関係性、カリキュラムへの包摂の度合いなどによって、生徒の学習効果、特に観光教育上の効果は異なってくることが予想される。3 年間を通してジオパークと主体的に関わるカリキュラムを有する室戸高校は、特に高い観光教育の要素を持っていると言えるのではないかと考える。

先行研究でも指摘されているように、学校の教育課程にジオパークをどのように取り入れるかは、現場の教員の戸惑いや人員上の難しさもある（柚洞ら 2016)。しかし、地域の観光人材の育成という観点からは、観光の諸側面について考え、学び、地域のためにアクションを起こすという観光教育の要素が重要と考えられる（大島 2016)。本研究での室戸高校の事例は、有意義な知見を提供すると思われる。

本研究は、長崎大学研究倫理規程に則って実施された。

謝辞

調査にご協力頂いた室戸ジオパークの専門員および室戸高校の教諭と生徒の皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

参考資料

1) 高知県: 令和 3 年度第 4 回高知県総合教育会議資料 8「高等学校の魅力化・情報発信の取組について」, https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/111601/files/2021061400477/file_20223233131832_1.pdf, 最終閲覧日 2023 年 2 月 1 日

引用文献

有馬貴之 (2016): 特集号「ジオパークの教育力―教育から学習へ―」巻頭言, 地学雑誌, 125 巻, 6 号, pp.779-783

有馬貴之・青山朋史・山口珠美 (2016): 箱根ジオパークと観光教育―帝京大学の演習授業にみる教育効果とその要因, 地学雑誌, 125 巻, 6 号,

pp.871-891
大島順子 (2016): 観光の教育力の構造化に向けて, 観光科学, 8 巻, pp.73-86
小河原孝彦・香取拓馬・茨木洋介・郡山鈴夏・竹之内耕・小林猛生 (2022): 糸魚川ユネスコ世界ジオパークにおける県立高校と連携したジオパーク学習の実践, 日本地質学会第 129 年学術大会講演要旨, T14-O-7
小泉武栄 (2019): ジオパークは自然教育や地域社会にいかに貢献できるか, ジオパークと地域資源, 4 巻, 1 号, pp.15-22
小山真人・村越真・上西智紀 (2011): ジオパークのガイド養成過程における大地の成り立ちの理解と その価値への気付き―伊豆半島在住の高校生に対するケーススタディー, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 19 巻, pp.11-18
坂口豪 (2018):浅間山北麓ジオパーク内の嬬恋中学校と嬬恋高校におけるジオパーク学習とその効果, 2018 年度日本地理学会春季学術大会発表要旨集, P315
竹之内耕 (2016):ジオパークの視点を導入した学校教育と社会教育の進展―糸魚川ユネスコ世界ジオパークを例に, 地学雑誌, 125 巻, 6 号, pp.795-812
深見聡 (2014): ジオツーリズムとエコツーリズム, 古今書院, 197p
森重昌之 (2020): 観光資源論から見た資源の「利用」の考え方―日本遺産を活用した兵庫県淡路島の取り組みを事例に, 阪南論集 人文・自然科学編, 56 巻, 1 号, pp.19-32
柚洞一央・山下聖・高橋冴 (2016): 室戸高校における地理学的視点を取り入れたジオパーク教育, 地学雑誌, 125 巻, 6 号, pp.813-829